

令和6年度
中学生平和大使派遣事業
(長崎・沖縄)
報告書



大府市

事業の概要

- 1 目的 次の世代を担う若者を「平和大使」として戦争により大きな被害を受けた国内都市に派遣し、戦跡・戦争関連施設の見学、戦争体験者や平和戦跡ガイドとの意見交換などを通して、戦争の悲惨さや平和の大切さを学び、同世代を始め、広く市民に伝えてもらうことを目的とする。
- 2 期 日 ①長崎派遣
令和6年8月22日（木）・23日（金） 1泊2日
②沖縄派遣
令和6年8月21日（水）～23日（金） 2泊3日
- 3 派遣人数 ①②各8人
事務局として以下の職員が随行
①地域福祉課職員（2人）
②教育委員会指導主事、大府西中学校長
大府中学校教諭
- 4 選出方法 広報おおぶ等で募集し、選考会において選出
- 5 対象学年 ①第2学年
②第1～3学年
- 6 報告書 平和祈念戦没者追悼式参加者へ配布するほか、市図書館及び中学校図書室へ設置。市公式ウェブサイトへ掲載

日 程

【委嘱状交付式・事前勉強会（全体）】 令和6年6月15日（土）

時間 午前9時30分から正午まで

場所 市役所2階201～204会議室等

内容 市長あいさつ、委嘱状交付、自己紹介、事業説明、事前勉強会（①大府市遺族会員及び愛友会大府支部員による戦争体験講話、②平和関連施設見学（被爆樹木二世アオギリ、平和都市宣言石碑）

【事前勉強会①（沖縄派遣者のみ）】 令和6年6月23日（日）

時間 午前10時00分から正午まで

場所 市役所2階203会議室

内容 沖縄の歴史について・平和に関するグループワーク

【事前勉強会②（沖縄派遣者のみ）】 令和6年7月26日（金）

時間 午前10時00分から正午まで

場所 市役所2階202会議室

内容 情報発信の仕方について・SNS活用研修

【長崎派遣】 令和6年8月22日（木）・23日（金）

（1日目）

5：30 市役所集合

6：10 セントレア到着

7：30 セントレア出発

9：05 長崎空港到着

10：40 被爆クスノキ・山王神社一本柱鳥居見学

12：00 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館見学

- 12:50 長崎原爆資料館見学（平和案内人によるガイドあり）
- 13:50 平和公園見学（平和案内人によるガイドあり）
- 15:00 長崎市永井隆記念館見学
- 16:00 被爆体験講話聴講
- 17:15 宿泊先到着
- （2日目）
- 9:00 長崎SDGs平和ワークショップ（宿泊先で実施）
- 10:45 宿泊先出発
- 11:45 長崎駅出発
- 13:32 福岡空港到着
- 16:00 福岡空港出発
- 17:20 セントレア到着
- 19:50 市役所到着 解散

【沖縄派遣】	令和6年8月21日（水）～23日（金）
---------------	---------------------

- （1日目）
- 6:30 市役所集合
- 7:10 セントレア到着
- 8:25 セントレア出発
- 10:45 那覇空港到着
- 12:55 ひめゆり平和祈念資料館見学
- 14:20 沖縄県平和祈念資料館見学
- 16:50 アメリカンビレッジ見学
- 19:40 宿泊先到着
- （2日目）
- 9:00 宿泊先出発
- 9:10 チビチリガマ見学

- 9：40 シムクガマ見学
10：20 座喜味城跡見学
10：50 ユンタンザミュージアム見学
13：00 平和講話及び平和ディスカッション（読谷村文化センター）
15：30 入村式（読谷村役場）
16：00 男女別に分かれ、各民家で夕食（沖縄料理）づくり→宿泊
（3日目）
8：45 離村式
10：20 那覇市国際通り見学（街中ガイドによる案内あり）
14：00 那覇空港到着
16：30 那覇空港出発
18：35 セントレア到着
19：50 市役所到着 解散

【派遣報告会】 令和6年9月14日（土）

時間 午後2時から

場所 市役所地下多目的ホール

内容 派遣報告の発表、「わたしの平和宣言」作成

【平和祈念戦没者追悼式】 令和6年10月6日（日）

時間 午前10時から

場所 市役所地下多目的ホール

内容 派遣報告、「わたしの平和宣言」の発表

平和大使の紹介

【長崎派遣】



池田 優里



中村 颯斗



小刀稱百奈花



戸田 楓菜



山本 晃正



川上 楓果



柴田 理仁



伴 帆夏

【沖縄派遣】



加藤 巧河



永田 姫愛



松井 悠誠



山内 みゆ



竹本 清登



松原 唯奈



浅田 菜那



加藤 優成

(順不同、敬称略)

「平和大使」感想文

(平和大使の想いを尊重し、原文を掲載していますが、一部修正しています。)

長崎派遣

2024.8.22 (木)・23 (金)



出発前、松山教育長と記念撮影をする平和大使（大府市役所）

当たり前ではない平和

大府中学校 池田 優里

平和大使となり、長崎派遣に行くまでの間、私は「おおぶ平和映画祭」に参加しました。「永遠の0」の映画を見たり、特攻隊として戦争に参加した方のご家族の話を聞いたりして、改めて戦争の悲惨さを感じました。それと同時に平和大使に選ばれた責任も改めて感じ、長崎で自分が何を学び、何を同世代の仲間や次世代の人たちに伝えることができるか、不安な気持ちになりました。

しかし、原爆の被害にあった長崎に行ったことで、戦争の悲惨さをより感じ、戦争を起こしてはいけないという気持ちが高まりました。そしてその思いは、被爆体験講話を聞くことで、長崎に行く前までに思っていたことを遥かに超えることとなりました。

被爆体験講話では、私たちにある質問がされました。

「今の日本はとても平和です。皆さんはこの平和な日本に戦争が起きると思いますか。」

こう聞かれ、私は想像ができませんでした。だから、私は首を横に振りしました。今の日本で戦争など起こるわけない、と。しかし、被爆者の方は「平和を当たり前だと思い、今の平和な日本に戦争など起こるわけがないとみんなが思ってしまうことが一番怖い。」と言いました。この言葉に、私は平和を当たり前だと思ってしまっていたということに気がつきました。そして、当たり前ではない平和を私たちが当たり前だと思い、過去に起きたことから目を逸らそうとしてしまうと、また長崎での悲劇が繰り返されてしまうかもしれ

ないと怖くなりました。

今の平和があるのは当時を生き抜き、頑張ってきた人たちのおかげです。しかし、世界の各地では悲惨な戦争・紛争が続き、核兵器で他国を威嚇しているという平和ではない一面があるのが現実です。そして核兵器の恐ろしさ、残酷さを知らない人たちが地球上にはまだまだたくさんいます。

長崎を最後の被爆地とするために、残酷な核兵器を地球上から無くすために、平和大使として次の世代の人たちに平和の大切さをしっかりと伝えていきたいです。



被爆体験講話で講話者・清野定廣さんの話を聞く平和大使



原爆に関する資料を閲覧する平和大使（長崎原爆死没者追悼平和祈念館）

平和のリレーをつなぐ

大府中学校 中村 颯斗

僕はこの派遣事業で、戦争の悲惨さや被爆の実相を学び、平和への想いがより高まりました。長崎原爆資料館や永井隆記念館での見学や被爆された方のお話を通して、戦争は二度と起こしてはならないものだということを改めて知ることができました。

長崎原爆資料館では現地で残っていた被爆物や当時の様子を表した写真などが展示されていて、とても虚しい気持ちになりました。永井隆記念館では、永井隆博士の生涯や被爆してからも自分より患者を優先し、必死に看病したこと、自身が白血病ということが判明してからも病室で戦争や平和に関する随筆を残し続けたことに感動しました。

また、被爆体験講話では、被爆された方の話を直接聞いて、このような被害を受けて苦しんでいる人を増やさないためにも、戦争は絶対に起こしてはいけないと強く思いました。そこで自分は何ができるかを考えたときに、長崎で学んだ戦争の恐ろしさや悲惨さについて僕が感じたことを家族や友人に伝えたり、インターネットなどを使用して発信したりしていくことが必要だと思いました。そうすることで、戦争の悲惨さや虚しさ、今でも戦争の後遺症で苦しんでいる人のことなど、「本当の戦争の恐ろしさ」というものを、戦争を直接知らない様々な人にも知ってもらえると思うのです。そして知ってもらった人々にも自分にできるような形で発信してもらうことで「平和のリレー」が誕生すると思います。

この派遣は自分にとって、世界をよりよく、平和にするための第一歩となりました。一緒に学んだ平和大使のみんなとともに、「平和のリレー」をつなぎ続けていきたいです。



原爆に関する資料を閲覧する平和大使（長崎原爆死没者追悼平和祈念館）



長崎SDGs平和ワークショップで発表する平和大使

「平和のバトン」を繋ぎたい

大府西中学校 小刀稱百奈花

「平和のバトンをつなぐ。」これは私が実際に長崎に行き、もっと戦争について知りたいと思ったきっかけの言葉です。

実際に被爆された方に話を聞き、戦争や原爆について分かったような気になっていたことを反省しました。世界中で戦争が行われていたとき、「平和」という言葉が存在していたのかと思うほどお互いを苦しめ合って、たくさんの人の命を奪い合っていたということを知りました。戦争はなければいいと思いますが、この戦争がなかったら、戦争がどれほど悲惨で怖いものなのかを知ることもなく、当たり前な生活をできることがどれだけ幸せなことなのかを考えることもなかったと思います。

「原爆というのは恐ろしいもの。」私はそう思っていました。でも長崎原爆資料館での見学や実際に被爆体験講話などを聞くことで、恐ろしいだけで済ませてはいけないと思いました。たった一つの原爆が一瞬にしてたくさんの人の命を奪い、まちを壊したこと、そして今も原爆症という病気で苦しんでいる人がいることを知りました。私は本当に戦争でしか解決できない問題だったのかと疑問に思います。それぞれに意見があり、考え方が違うのは当たり前だけれど、そこで戦争をするのではなく、お互いの気持ちを考えてみることも大切だと思います。

平和公園では大きな噴水を見ました。この噴水は戦争中に水がなくて困っていた人や亡くなってしまった人を思いつくられたそう

です。その噴水には「どうしても水が欲しい。」と当時の人が願っていたことが書いてありました。今すぐ水を飲まないで亡くなってしまいうらいになっても飲める水がなかったということを知り、その噴水を見ていると、とても心が苦しくなりました。私の周りには当たり前のようにたくさんの綺麗な水があります。でもそれは当たり前のことではなく、とても幸せなことだと改めて感じました。

今回の派遣に行ったことで感じられたことや教えてもらったことなどを周りの人にしっかり伝えていきたいと思います。そして当たり前前に感謝し、自分にできることを考え、行動していきます。



長崎市永井隆記念館を見学する平和大使



長崎SDGs平和ワークショップで意見交換をする平和大使

平和の尊さ

大府西中学校 戸田 楓菜

私は、長崎に行くことで、今の私の生活のありがたみを実感することができました。

原爆死没者追悼平和祈念館で読んだ本に「人間を返して」と書いてあったことがずっと心の中に残っています。これまでの過去が全部なかったことにされたかのように洋服、家、宝物、そして人間でさえ一瞬で消してしまう。人が作った核兵器で、ものすごい数の人を消してしまうなんて、あまりにも残酷すぎて想像したくなくなりました。自分の周りに、自分を知っている人がいてくれることがどんなに幸せでありがたいことかを改めて感じるすることができました。周りにいてくれる方への感謝の気持ちでいっぱいです。また、私と同じような年齢の子が望んでもいないのに働いて、何も悪いことをしていなくても苦しまなければいけなかったことも教えてもらいました。生まれた時代以外に何も変わらないはずなのに、こんなにもかけ離れた生活をしていたんだなと思うと本当に辛いです。お腹いっぱいご飯を食べられることも、学校に通い勉強できることも、私が送っている生活は全て平和が土台にあるからできることで、当たり前だと思っていることは大間違いだということを改めて実感させられました。

私たちが今、平和を土台に生活できているのは平和を作ってくれた人たちや平和を繋いでくれた人たちがいるからです。日本で起きていた戦争という事実を、今送っている生活は決して当たり前

いていくものではないことを多くの人に伝えていきたいです。私たちと同世代の人にも興味を持って聞いてもらえるような、誰かに伝えたいくなるような工夫した伝え方をして平和の輪を広げたいです。そして、一緒に考えていけば、平和に対する新しい価値観も見つけていけると思います。

今この瞬間にも世界のどこかで戦争が行われています。その現実を絶対に忘れることなく、自分の言葉に責任を持って、今回の派遣で感じたこと、学んだことを、心を込めて伝えていき、平和のバトンを繋げていきます。



平和案内人の説明のもと、戦争遺品を見学する平和大使（長崎原爆資料館）



説明を受ける平和大使（長崎原爆資料館）

当たり前ではない平和

大府西中学校 山本 晃正

1945年8月9日午前11時2分。これは、長崎に原爆が落とされた日時です。その年の12月までに、長崎では73,884人ものが亡くなりました。この事実は僕に、戦争という過ちを二度と起こしてはいけないということを改めて感じさせてくれました。

今回の長崎派遣に参加して、知ったこと、感じたことがたくさんあります。

原爆死没者追悼平和祈念館では被爆記を見ました。長崎で被爆した人たちの思いがつつられていました。中には、広島で被爆して、避難した長崎でまた被爆したという人の記録もありました。この記録を見て僕は、戦争中は日本のどこにも安全な場所がなかったのだということを思い知りました。

平和公園にある平和の泉では、「被爆した人は水を飲めずに亡くなった人が多くいたから、平和の泉を作った。」という話を聞きました。原爆死没者追悼平和祈念館にも同じように池のようなものがありました。水を求めて亡くなった人のことを考えて作ったものが多くあり、水を飲みたいという小さな願いさえ叶わずに亡くなった大勢の人がいたことを考え、胸が痛くなりました。

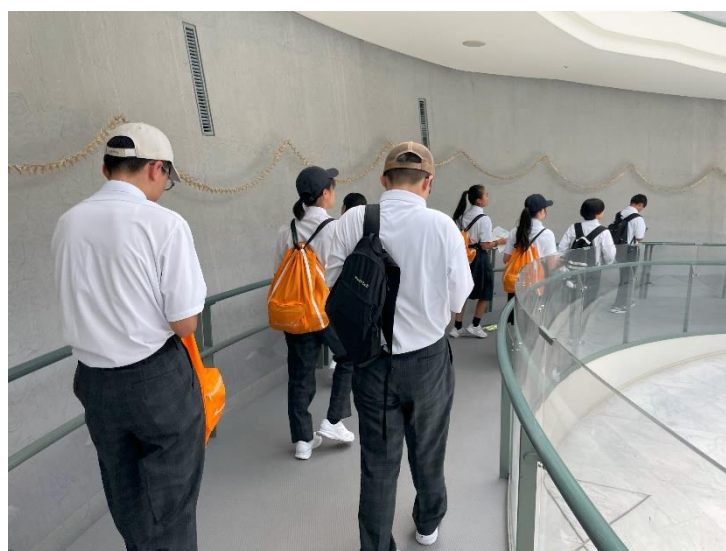
平和ワークショップでは、これまで学んできたことを生かし仲間と協力して、平和に向けて何ができるかを考えて、最終的に発表しました。考えたことや感じたことをみんなで付箋に書き出していくと、僕とは違う意見があって面白いなと思いました。また、見方が

違いは答えも違うということ、自分にできることにはいろんな方法があることに気付かされました。

今回の長崎派遣を通して、戦争は二度と起こしては行けないものだと思います。友だちや家族に原爆の実相や平和の大切さについて伝え、インターネットを通じた発信も使って、たくさんの人に伝えていきたいと思いました。もう二度と、戦争を起こしてはいけないことを、何回でも繰り返し伝えていきたいです。



長崎SDGs平和ワークショップで意見を出し合う平和大使



長崎原爆資料館を見学する平和大使

平和の輪

大府南中学校 川上 楓果

戦争は悲惨で残酷だ。今回の派遣事業を通して、私が一番感じていることです。

長崎原爆資料館で目にした、黒と赤で描かれた絵。11時2分で止まった原爆時計。高温で溶けた瓶の展示などから、とても表現できない悲惨な状況であったことを感じました。人々のいつも通りの生活と命を一瞬で奪い、生き残ったあとにもたくさんの影響を残した原爆の恐ろしさを強く感じました。

去年亡くなった私のひいおばあちゃんは、長崎で生まれ育ち、戦争を経験していますが、お母さんもおばあちゃんも私も、ひいおばあちゃんが戦争の話をする姿を見たことがありませんでした。今は直接聞くことはできませんが、戦争のときのことを思い出すのはものすごく辛く、苦しかったんだろうと思います。私でも、長崎で見聞きしたあの情景が目の奥に浮かんで怖くなることがあります。実際に身をもって経験したひいおばあちゃんはもっと怖かったはずで

す。

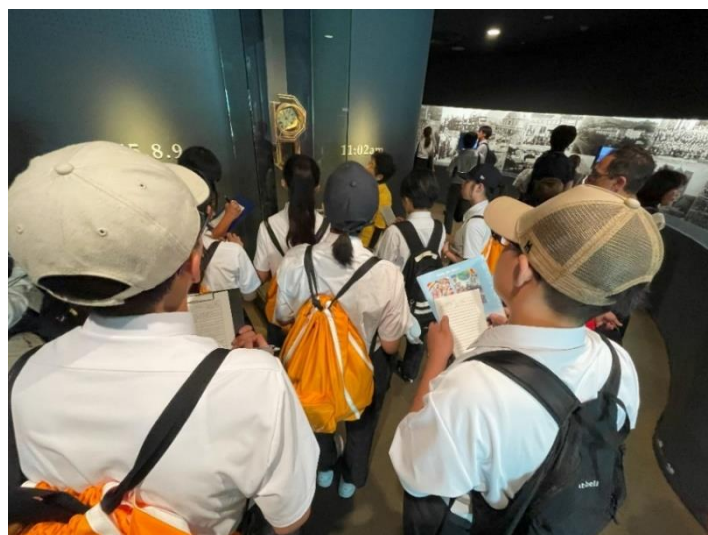
そういうときは、長崎原爆資料館を出てから見た今の長崎の風景や平和な街並みも合わせて思い起こすようにしています。多くの人が犠牲になり、大きな被害を受けた長崎の街は、たくさんの人々の力で前に進み、今があるということが分かりました。

それから、ひいおばあちゃんが生き抜いてくれたから今の私があることを改めて実感し、自然と心が温かくなります。朝起きて、学校に行って友達と話せること、家に帰って家族と食卓を囲むこと、お風呂に入って暖かい布団で眠れること。単純なことかもしれませ

んが、こういう平和を私は守りたいと思います。

また、これから私は、人と人の関わりや絆を大切にしたいと思います。差別や偏見なく、平等で対等であることや、相手を理解できるように歩み寄り、尊重すること。たくさんの人と助け合っていることを忘れず、私も平和をつくる一員であることを考えていきたいです。

これからの平和をつくっていくのは私たちです。みんなで平和の輪を広げていけたらいいなと思います。



原爆が投下された時刻で止まった柱時計を見学する平和大使（長崎原爆資料館）



展示パネルを読む平和大使（長崎原爆死没者追悼平和祈念館）

平和に向けて、できること

大府南中学校 柴田 理仁

僕は長崎派遣で原爆がその地域に与えた影響や原爆の悲惨さについて知ることができました。また、平和とは何か、改めて考えることができました。

長崎派遣で印象に残っていることは2つです。

1つ目は、長崎原爆資料館で見たものです。原爆によって亡くなった方の遺品として、原爆が落とされた時間で止まっている時計や石やガラスの破片によって100以上の穴が開いたシャツなど、さまざまなものが置いてありました。写真も飾られており、これらのものは戦争の悲惨さを表していました。

2つ目は、被爆経験者の方のお話が聞けたことです。当時を知る人から直接話を聞いたのは、とても貴重なものでした。原爆は、本当は長崎に落とすのではなく、軍事工場のあった福岡県の小倉に落とす予定だったこと。原爆が投下された日は曇り空で小倉が見えなかったから長崎に落とすことにしたこと。原爆は多くの人の命を奪い、長崎の人の生活を一変させたことなど、被爆を経験された方だからこそ感じた憤りや怒りなども含めたお話を聞くことができ、戦争の悲惨さや恐ろしさを感じました。その憤りや怒りを受け入れながら、それでも前に進み、当時のことを話すことは、とても辛く大変なことだと思います。でも今の日本があるのは、戦争があったからです。戦争を知らない世代の僕らも、それを決して忘れてはいけません。

平和大使として長崎に行き、日々の当たり前が当たり前ではないことに気付くことができました。何気ない日々の暮らしに感謝し、平和について考えることが平和への第一歩です。そして、戦争は恐ろしいものだということを伝えていくことは、平和大使となった僕の使命だと思いました。

「戦争は二度と起こさない！繰り返してはいけない！」ということを、まずは身近な家族や友だちに強く訴えていきたいです。平和について考えるのは難しいことだけれど、今の自分たちがあるのは、戦争や原爆を経験した人たちの努力があってこそということを忘れず、自分も平和を作っていく一員として、向き合っていきたいと思っています。



平和案内人の説明を聞く平和大使（平和公園）



原爆の遺構を見学する平和大使（長崎原爆資料館）

戦争の恐ろしさを忘れないために

大府南中学校 伴 帆夏

「戦争の恐ろしさを忘れてほしくない。」これは被爆者の方が言っていた言葉です。戦争や原爆が恐ろしいものだという事は知っていましたが、長崎へ行き、長崎原爆資料館、地層を実際に見て、自分が思っている以上に恐ろしく、とても怖いということを実感しました。

長崎へ到着し、最初に見た山王神社にある一本柱鳥居。住宅街にポツンと、大きくて柱が片方しかない鳥居が立っているのを見て鳥肌が立ちました。とても大きく、石でできていて普通に考えて倒すことは不可能な鳥居が片方は倒れていたことに本当に驚きました。

その後、長崎原爆資料館に行って、この鳥居を背景にした集合写真を見ました。この写真は原爆が落ちる数日前に撮られたもので鳥居の柱は二本あり、その数日後に原爆が落とされたと思うととても怖いと思いました。その集合写真も、笑顔で写っている人は誰もおらず、その表情からも戦争の恐ろしさが伝わってきました。

そのあとに聞いた被爆体験講話の中で、被爆者の方の言葉で驚いたことがありました。「戦争中よりも戦後の方が苦しかった。」私は戦争中、いつ原爆が落とされるかわからないという恐怖や親や友だちに会えないという悲しみ、食べるものがないという苦しみがあると思っていたため、戦時中のほうが苦しかったのではないかと思っていましたが、戦後も家、家族、食べるものがなかったことを聞きました。そして、放射線を浴びたため、いつ死んでもおかしくない

と思ってビクビクしながら毎日を過ごしていたと聞きました。当時は放射線についての知識もなく、救援・救護に行った人たちも残っている放射線を浴びて、直接原爆に遭っていない人たちも次々と亡くなったことを聞きました。「アメリカだけが悪いのではなく、戦争を仕掛けた日本の方が悪いのだ。」という被爆者の方の話を聞いて私は虚しさを感じました。

私は、この派遣を通じて、このような戦争をもう二度と起こしてはならないということを改めて感じました。そのために私は、学んだことを友だちや学校の人、先生や家族などに伝え、発信していきます。小さな一歩でも踏み出して、みんなが知って考えることで、少しでも世界が平和になればと願いを込めて。



平和案内人から写真の説明を受ける平和大使（長崎原爆資料館）

被爆クスノキを見学する
平和大使（山王神社）



沖縄派遣

2024.8.21（水）～23（金）



派遣で訪れた読谷村の村長と記念撮影をする平和大使

平和とは何か

大府中学校 加藤 巧河

「本当にこんなことがこの日本で実際に起きていたのか？」

3日間の体験で何回も頭の中を駆け巡ったのは、この言葉でした。僕は中学生平和大使派遣事業に参加して、沖縄戦で実際に起こったことや戦争の悲惨さや平和の大切さを、現地での体験をもって本当の意味で学ぶことができた気がしています。

3日間の派遣の活動で一番印象に残ったのは、ひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館です。ひめゆり学徒隊は、負傷した兵士の治療をしていた僕たちと年もあまり変わらない学生です。うめき声が響く暗い壕の中で、負傷者を治療し続けるのはとても怖く不安だっただろうと思いました。先の見えない壕の生活の中、急に解散命令が出され、行く当てもなく壕の中から追い出され、父母を呼びながら、自分で死を選ぶ自決によって亡くなった人も多くいたことを聞きました。今の自分には想像できない世界が、少し前の日本にはあったのだということを思い知りました。

僕は派遣事業の間、とてもたくさんのことを学びました。沖縄は綺麗な海のある観光地としての印象が強かったのですが、つい80年ほど前までは戦争をしていたこと。その戦争はたくさんの人を傷つけ、今もなお苦しんでいる人がいること。そして、平和な世の中に思える今も、沖縄にはたくさんの不発弾が埋まっていること。僕はこの沖縄戦のことを他人ごとではなく自分だったらどうだろうと考え、とても怖くなりました。

この3日間、「平和」とは何かを考えました。僕はこの沖縄戦の記憶を忘れさせないため、これからも「平和とは何か」を考え続けていきたいです。そして、沖縄で実際に起きたこと、戦争の悲惨さを通して、平和の大切さをしっかり語り継いでいきます。



大府市遺族会員及び愛友会大府支部員による戦争体験講話の様子

伝え、つないでいくこと

大府中学校 永田 姫愛

「君たちは今日までよく頑張ってくれた。」これはひめゆり学徒隊が敵を目の前にして言われた言葉です。

ひめゆり平和祈念資料館を訪れると、ひめゆり学徒隊の子たちの楽しそうな写真がたくさんありました。部活をしたり、先生にあだ名をつけたりして私たちと同じような日常生活を送っていました。しかし、戦争によって彼女たちの人生は一変しました。多くの生徒が戦争に動員され、傷を負った患者の世話をを行う、それは地獄のような毎日だったそうです。幸せだった日常が奪われ、好きなこともできなかつた。私はこのことを知り、胸がギュッと締め付けられたように苦しくなりました。しかし残酷なのはここからでした。「解散命令」が出されました。集団で生活していた壕から出て、自分たちで行動しろということです。砲弾の中を逃げ、ケガをしたり、吹き飛ばされたり、「集団自決」を選ぶ人も多くいました。戦争が終わり、生き残った少数のひめゆり学徒隊は、生き残ったという喜びより苦しみを感じていました。「友だちは死んでしまったのに自分だけ生き残って申し訳ない。」という言葉が、資料館に書かれていました。この事実を知って、私は言葉を失いました。せっかく命が助かっても、そう考えてしまうほど、戦争は人々の心をえぐるように一生消えない深い傷を付けたことを知りました。

私たちは戦争の悲惨さ、平和のありがたみを知らない世の中に生まれてきました。だからこそ、それらを知る必要があります。今回

の派遣でそれを学んだ私たちは、今度は知ったこと、感じたことを周りの人に伝えていく立場です。「伝え、つないでいくこと。」戦争という過去の過ちを忘れないために、今の私たちにできることだと思います。

この派遣で戦争の反対は「平和」ではなく「対話」だということを知りました。争いごとの大小に関係なく、まずは一人ひとりが相手を知って理解する努力をすれば少しでも争いは減るのではないかと思います。

世界の人々が向かい合い、話し合っ、笑顔あふれる日常を送れる未来に向けて、平和の心を伝え、つないでいきたいです。



沖縄派遣事前勉強会の様子

知っておかなければいけないこと

大府西中学校 松井 悠誠

僕は、今回平和大使として、ただ歴史としての戦争の事実を知ることだけでなく、自分に置き換えて、戦争に向かう立場だったら、見送る立場だったら、戦後残された立場だったら…と、それぞれの立場に立って気持ちを考えてみるというテーマを自分に課して、参加しました。

僕と同じ世代の人たちが、戦争に向かうことや、特攻隊、ひめゆり学徒隊として戦場に駆り出されたとき、本当の胸の内はわからないけど、国のためにと誇りに思っていたことを思うと、今の自分はとても未熟だと感じました。僕だったら胸を張って「行ってきます。」と言える自信はありません。将来の夢や希望、すべて断ち切られ、生きたいと思うことを口に出すこともはばかれるなんて、ただ辛くしんどいことで、僕には想像もつかないほどの絶望だったと思います。

「チビチリガマ」や「シムクガマ」の真っ暗な洞窟の中で起きたことを聞いたときは、悲しく、苦しく、言葉にならない思いになりました。ガマの中で自決した人、敵に射殺される覚悟を決め、外に出た人。極限まで気持ちが追い詰められとき、自分だったら、怖くてどちらの選択もできないと思いました。

この派遣に行って強く感じたことは、戦争は「知らないから仕方ない」ではなく、「知っておかなければいけないこと」だと思いました。確かに今の日本に戦争はなく、不自由なく暮らすことができ

ています。しかし、世界では争いが起こり、関係のない市民が巻き込まれ、命を落としています。ひめゆり平和祈念資料館で聞いた、「戦争は一瞬で始まるが、すぐには終わらない。」という言葉がとでも心に残りました。全ての人にそれぞれの生活があるのに戦争で全てが変わってしまう、奪われてしまうからです。日本だけでなく、世界でこんなことが絶対に起きてはいけないということを伝えていきたいです。今回知った戦争の記憶を、絶対に風化させず、核がない、戦争がないことが当たり前の世界を目指し、語り継がねばいけないと思います。



ガマの前でガイドから説明を受ける平和大使（チビチリガマ）

忘れてはいけないこと

大府西中学校 山内 みゆ

この派遣事業で沖縄に行く前まで、私は、太陽の下で平たい地面を歩くことは当たり前だと思っていました。

私は、初日にガイドさんが言った「戦争は、人を人じゃなくさせる。」という言葉がとても印象的でした。最初は、それがどういった意味なのかよく分かりませんでした。戦争の跡地を回って行くうちに、その言葉の意味が少しずつ理解できた気がしました。

ひめゆりの塔と平和祈念資料館では、私と近い歳の子が戦争で戦い、看護師として働き、自らの命を捧げ、多くの子が残酷な死に方をしたことを知り、とても衝撃を受けました。

ガマと言う鍾乳洞にも入りました。「シムクガマ」の中は、でこぼこしていて滑りやすく、懐中電灯をつけないと真っ暗で何も見えません。私は、両手を使いながら、先生たちの力を借りて、必死にでこぼこ道を進みました。気を抜いたら、川に落ちてしまいそうで、冷や汗が出ました。こんな危険な所に、小さな子どもやお年寄りが千人近く生活していたと思うと、恐怖で鳥肌が立ちました。

沖縄では、どこに埋まっているのか分からない不発弾に、今も脅かされています。その現状を聞き、私は、戦争が終わってこんなに平和に見える世の中にも戦争の傷は残るのだと知り、戦争は絶対に起こしてはならないと強く思いました。

私には、やりたいことがたくさんあります。戦争で亡くなった人たちにも、きっとやりたいことが数えきれないほどあったと思いま

す。もう一度太陽の下を堂々と歩きたい、友だちや家族と笑い合いたいと願って死んでいった人たちのことを思うと、今ある当たり前がどんなに幸せなのかと思い知らされます。

戦争で一番忘れてはいけないことは、多くの人が亡くなったこと、そして、そんな悲惨で残酷な戦争を起こしたのが、私たちと同じ人間だということです。今、私ができることは、恐ろしい戦争が起きた事実を多くの人に伝えること、相手を思いやり、自分の意見を隠さずに伝えること、戦争がない平和な時代を噛みしめて、大切に生きることだと、改めて思いました。



平和講話を聞く平和大使（読谷村地域振興センター）

平和な日常への感謝

大府北中学校 竹本 清登

僕は平和大使として派遣された沖縄で、たくさんの方にお世話になり、色々な場所を案内してもらい、話を聞かせていただきましたが、最も印象に残った所はガマです。

ガマとは鍾乳洞のことで、アメリカ兵が沖縄に上陸した際、読谷村の住民の多くは、「チビチリガマ」と「シムクガマ」に分かれて避難をしました。このとき「チビチリガマ」では、アメリカ兵に見つかれば何をされるか分からないという恐怖から、肉親同士が殺し合い、親が我が子を手にかけるといった集団強制死が行われました。一方、「シムクガマ」では「アメリカ兵は、兵士以外は殺さない。」と言った人がいたおかげで、約1,000人の全員が助かりました。

僕はこの話を聞いたとき、胸が苦しくなり言葉を失いました。大切な人同士で殺し合う。死の恐怖の前に何が正しい判断なのかも分からず狂ってしまったのだと思います。

また、第一女学校の近くにあった病院では苦しむうめき声が絶えず、水を求めて自分の尿を飲んだ人がいたこと、気がおかしくなってしまった人がいたこと、自分と年が変わらない中学生が戦争に参加して死んでいったことを聞きました。

この3日間、自分だったらどうだろうと何度も想像しました。いつ死ぬか分からない、明日が見えない毎日の中で正気でいられるだろうか。自信がありません。

平和祈念資料館で不発弾を見たときは、その不気味な迫力に息を

のみました。不発弾の処理には80年から100年かかるそうで、読谷村にはいまだたくさんの不発弾が残っている可能性があるそうです。こんな近くに戦争の痕跡があることにぞっとしました。

今回の派遣で強く感じたことは、戦争は終わった昔のことのよう
な気がしてしまいましたが、本当は一度始めたら決して終わらない、
地獄なのだということです。戦争の恐ろしさを見聞きしたあとに見
た沖縄の海は、とても美しく、穏やかで平和でした。当たり前にあ
る日常の大切さが、そのとき初めて分かった気がします。

僕は今回の体験を決して忘れず、たくさんの命を失った結果とし
て手にした今の平和を守るために、周りの人たちに平和の大切さを
伝えていきたいです。

「ぬちどうたから」(命こそ宝)。

今回学んだ、沖縄の言葉です。戦争を昔話として風化させないた
めに、この言葉の意味をずっと呼びかけ続けていきたいです。



沖縄の美しい穏やかな海

沖縄で学び、感じた平和への千羽鶴

大府北中学校 松原 唯奈

「はいさーい」「めんそーれ」「なんくるないさ」

これらは沖縄の方言です。それぞれ「こんにちは」「ようこそ」「なんとかなるさ」という意味です。

沖縄といえば、きれいな海や愛くるしい顔のシーサーなど、明るいイメージを思い浮かべることが多いですが、悲惨な戦争の歴史なしには語れないことを今回の平和大使の活動を通じて知ることができました。

ほんの50数年前、私たちの親が産まれるころまで、沖縄はアメリカ領土でした。今も在日米軍施設の約7割が沖縄に集まっています。派遣中に米軍基地の横を通ったとき、施設内にある戦闘機が見えました。大府での生活では見ることもない光景にびっくりして、戦争の面影に背中がぞくっと冷えた気がしました。

ガマは、戦争中住民が逃げて身を隠していたところ。「シムクガマ」の中に入りましたが、真っ暗で何も見えず、人が生活していたとは想像できないところでした。「チビチリガマ」ではアメリカ兵に捕まると殺されると教えられていたため、多くの方が自決したそうです。親子が一緒でも悲しい決断をしなければならず、辛く、胸がしめつけられる思いがしました。また、ひめゆりの塔では私たちと同年代の子が兵士の看病をしていたと知りました。戦争中の思想や教育は、現在では想像を絶するような恐怖や悲劇があったと知りました。

派遣中印象に残っていることの1つに、訪れたところの多くに千羽鶴が飾ってあったことです。この折り鶴1つ1つに人々の平和への願いが込められていると思いました。平和を願わない人はいません。平和はみんなの願いです。世界には戦いをしている国があり、日本にも基地問題など未解決な課題があります。私たちにできることは、これらを自分たちの問題として関心を持ち考えること、戦争は絶対にしないと思いつけること、悲惨な戦争の事実や平和への願いを伝え続けることだと思いました。日常的には相手を思いやること、相手を尊重すること、その先に人の輪、平和があると思うので、これらを繋ぎ、守っていきたいと思います。



ひめゆりの塔と平和を願う千羽鶴（ひめゆり平和祈念資料館）

私たちが繋いでいく本当の平和

大府南中学校 浅田 菜那

私は、今回平和大使として沖縄に行きました。皆さんは戦争とは何か、平和とは何か考えたことはあるでしょうか。戦争と聞いて、沖縄での地上戦や、広島・長崎への原爆投下を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。今回、沖縄に行き、平和のことを学ぶうちに、私たちが楽しく、そして当たり前前に中学校へ行って勉強していることがどれだけ幸せなことなのか痛感しました。

私と同年代の中学2年生の女学生。この時代の女学生は、戦場に行き、患者さんの手当てや亡くなった方の埋葬、ピンポン球ほどの小さなおにぎりを作るなど、たくさんの仕事を行っていました。戦場では、粗末な2段ベッドが並び、患者さんのうめき声や、叫び声が響いていたそうです。地上戦で攻め込まれ、行き場がなくなった女学生は、「これから自分の判断で行動するように。」と大人から急に言われ、敵の目の前で、自分たちだけで考えて行動することとなりました。生きていくことが苦しくなった女学生は、最終的には海に飛び込み、自ら命を絶ったそうです。私は、この話を聞いたとき、驚きのあまり、声すら出ませんでした。今、私たち中学生が戦場に行くなんて考えられますか？少なくとも私は考えられません。

日本でも戦争があったという事実から、目を逸らしてはいけません。「もう終わったこと、私には関係ない。」なんていう考え方をしてはいけない、私はそう思いました。一度の戦争で、どれだけの人が亡くなったのか、どれだけの人が心と体に傷を負ったのか、考え

るだけでも鳥肌が止まりません。

私は、「平和大使」として、沖縄に行き、沖縄戦のことや戦時中に避難していた場所を詳しく学びました。戦後79年が経ち、戦争を体験した方々もだんだんと少なくなっています。戦争を二度と起こさないためにはどうしたら良いのか、なぜ戦争が起こるのかななどをクラスメイトと話していきたいと思います。また、私たち平和大使が沖縄で学んだことを家族や知り合い、大府市の中学生、また愛知県の人々に伝えていけたらいいなと思います。世界中の人々が笑顔で過ごしていけますように。



座喜味城跡を見学する平和大使

命のバトンを次の世代へ

大府南中学校 加藤 優成

僕は大府市の平和大使として沖縄に行きました。沖縄では、戦争についての学習や、今の沖縄の文化を体験し、「当たり前ではない平和」を実感しました。

この派遣で僕が一番印象に残っているのは、戦争中のガマでのできごとです。「チビチリガマ」では83人のこどもを含めた140人が生活していましたが、アメリカ兵に捕まることを恐れて捕まる前に自ら命を絶ち、こどもたちにいたっては自ら親に頼み、親の手でこの世を去った子もいたと聞きました。この話を聞くだけでも呼吸がしづらくなるくらい辛く、僕は幸せに暮らしていることに罪悪感すら覚えました。

当時、戦争で生き残った人は、戦争が終わったあとも辛く、地獄のようだったと言います。せっかく生きて帰れたのに、なんで生き残ってしまったんだと考えてしまったり、そう言われたりするなんてとても想像できませんでした。ですが、僕が驚いたのは生き残った人たちの心の強さです。生き残ったことには意味があると考え、忘れてはいけない戦争の事実を次の世代へ伝えていこうと前を向いて歩き出し、活動をした強さ。平和大使として沖縄へ行った僕も、今回の派遣で見たこと、聞いたこと、学んだことから戦争の事実を受け止めて、次の世代へと伝えていきたいと強く思いました。戦争は決して他人ごとではありません。もし、僕たちのひいおじいちゃんやひいおばあちゃんが戦争で亡くなっていたら、僕たちの命はあ

りませんでした。過去に苦しんだ人たちから受け取った「命のバトン」を、僕たちも無事に未来へと渡していかないといけません。

全国にはたくさんの戦争に関する資料館や遺跡などがあります。実際訪れて当時のことを知ることが平和の尊さを知る一番の方法ではないでしょうか。修学旅行や学校の授業で訪れる機会がもっと増えればいいなと思いました。また、今回の沖縄滞在中にはSNSでも現地の様子を発信しました。SNSでの発信も、多くの人々に届けることができる方法の一つです。少しでも多くの人に平和の大切さが届くように伝えていきたいと思います。生き残ったことには意味があると立ち上がってくれた人たちに、役割を果たしましたと自信を持って言えるように。



「平和の火」を見学する平和大使（沖縄県平和祈念公園）

平和都市宣言文

緑香るにぎわいの中、子どもたちの笑い声が響き、汗流し働く若者の姿や地域で活躍する元気な高齢者の姿が目映るまち、健康都市おおぶ。大府市は、戦争のない平和な社会のもと、健康都市づくりに取り組み、着実な歩みを続けています。

世界の恒久平和は、人類共通の願いであり、日本国憲法の普遍の原理です。しかし、今なお世界各地で、核兵器の保有、テロ行為、武力紛争などの平和を脅かす様々な問題が起きています。

先人から引き継いだかけがえのない平和のバトンを守り、次の世代の子どもたちにしっかりと渡していくことは、今を生きる私たちの果たさなければならない重大な責務です。私たち大府市民は、一人ひとりの命を大切に、核兵器、テロ行為などの脅威のない平和な社会の実現を強く訴えます。

日本国憲法の公布から70年目の節目の年に、恒久平和とあらゆる争いのない社会の実現を願い、ここに「平和都市」を宣言します。

平成28年9月27日 大府市



「平和都市宣言」石碑（平成29年9月1日設置）